

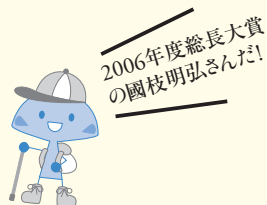
学内六報

2021.9.24

no.1550



8月18日に安田講堂で行われた真打昇進披露口上より



志ある卓越。  東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

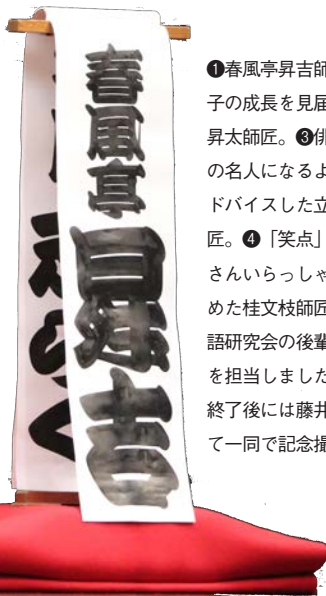
東大卒初の真打誕生!
春風亭昇吉師匠、
安田講堂で昇進披露

UTokyoNYが全学の国際拠点に

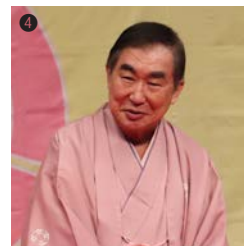
東大卒初の真打誕生!

春風亭昇吉師匠が安田講堂で 昇進披露落語会を開催

東京大学と落語芸術協会は、SDGsを基盤に協定等を視野に入れた連携を模索しています。8月18日には、両組織の交流を象徴するイベントとして、2006年度総長大賞を受賞した本学卒業生、春風亭昇吉さんの真打昇進披露落語会を安田講堂で行いました。ご本人の敬愛する3人の師匠が並んで口上を述べ、落語を披露した会の模様と、当日行った記念座談会の内容を紹介します。



①春風亭昇吉師匠。②愛弟子の成長を見届けた春風亭昇太師匠。③俳句より落語の名人になるよう後輩へアドバイスした立川志らく師匠。④「笑点」より「新婚さんいらっしゃい!」を勧めた桂文枝師匠。⑤東大落語研究会の後輩二人が司会を担当しました。⑥落語会終了後には藤井総長も含めて一同で記念撮影。



春風亭昇吉こと國枝明弘さんは、岡山大学を経て本学の文科二類に入学し、2007年に経済学部を卒業しました。在学中には落語研究会（落研）で活動し、その目覚ましい活躍により、2006年度の学生表彰総長大賞で総長大賞を受賞しています。真打になったら安田講堂でお披露目をやってほしいと卒業式で当時の副学長の先生に声をかけられ、その言葉を胸に、弟子入りした春風亭昇太師匠の下で修業と研鑽を重ねてきたという昇吉さんは、今年5月に本学卒業生として初め

て真打に昇進。師匠と呼ばれる身となつての凱旋公演の前に「この安田講堂で落語ができることは、自分にとって非常に深い意味があります。夢がかなった思いがします」と心境を語りました。

会では、所属事務所の先輩でテレビ番組でも親交の深い立川志らく師匠、2007年の入門から指導を受けてきた春風亭昇太師匠というゆかりの深いお二人が落語を披露。弟弟子である春風亭昇羊さんが司会を務めた真打昇進披露口上、口上の前後には昇吉師匠と準備を重ねて

きた社会連携本部長の津田敦先生による挨拶、江戸文学を研究している人文社会系研究科の佐藤至子先生によるミニ解説があり、続いて学生時代からアドバイスを仰いできた桂文枝師匠が落語を披露した後、トリとして昇吉師匠が登場。两国橋における職人と侍のいざこざを描いた古典落語「たが屋」を熱演しました。

会の模様はライブ配信され、学生、教職員、卒業生など2000名超が、出囃子が響き職が翻る大講堂で展開された真打たちの話芸に耳を傾けました。

記念座談会

春風亭昇吉 × 津田 敦 × 佐藤至子 × 佐藤健二

落語芸術協会真打・本学卒業生

執行役・社会連携本部長

人文社会系研究科准教授

執行役



実は以前から深かった落語と東大の関係性

津田 昇吉師匠は2007年経済学部のご卒業で、在学中の落語の活動が評価されて2006年度の総長大賞を受賞されました^{※1}。学生落語選手権「策伝大賞」での優勝と、落語に関するボランティア活動が評価されたそうですね。

昇吉 「策伝大賞」は落語の甲子園のような大会で、審査委員長が桂文枝師匠でした。3年次にこの賞をいただき、落語は荒削りやけど枕がおもしろいと講評されたのが嬉しかったです。4年次には高齢者施設、少年院、盲学校などで落語の公演活動を行いました。耳の感度が抜群の盲学校の生徒さんから声がとても聞きやすいと言われたのも涙が出るほど嬉しくて。こうしたことが後押しとなって落語家になったんです。

津田 本日は文学部の佐藤至子先生にも参加してもらいました。

佐藤至子^{ゆまこ} 主な研究対象は草双紙ですが、落語も学生時代から大好きで、岩波書店の『円朝全集』をお手伝いしたり、延広真治^{※2}先生にお導きいただいて落語の研究も少しずつ続けています。

津田 そもそも真打とはどういうものですか？

昇吉 見習い期間を経て、前座として約4年、二つ目として約10年の修行生活を送り、それから真打になります。真打になってできることは、弟子をとれる、寄席でトリをとれる、呼称が「師匠」になる、の3つです。

津田 佐藤至子先生には真打の語源について調べていただきましたね。

真打は話しつつ蠟燭の芯を切る？

至子 寄席の最後の出演者が蠟燭の芯を打って消すことによるという説が知られますが、資料を見てもよく分かりません。昭和11年に岡本綺堂が『日本及日本人』という雑誌に明治時代

の寄席に関する随筆を寄せていて、そこには「高座に出ている芸人は途中で蠟燭の芯を切らなければならない。落語家などが自分の話を続けながら蠟燭の芯を切るのはすこぶる難しく、それが満足にできるようになれば一人前の芸人であると言われていた」とあります。昔は明るさを保つために蠟燭の芯を切る必要がありました。次第に音に引っ張られて「真を打つ」が「芯を打つ」だと思われるようになったのでしょうか。

津田 師匠の学生生活についても聞きたいです。

取りやすい単位を狙った駒場時代

昇吉 最初はボクシング部でしたが、その後、落研に入りました。教養学部では単位が取りやすい授業ばかり履修する学生でした。経済学部では岡崎哲二^{※3}先生のゼミに所属していました。先生が毎回30頁ほど英語の論文を印刷して配り、学生が読み込んで発表するんですが、ゼミ生が3人しかおらず、3週に一度発表があっただけでした。あとは家庭教師のバイトと落語を頑張りました。落語は朝から晩まで受験勉強のようにずっと勉強していましたね。

津田 今日は佐藤健二先生もいらっしやいます。

佐藤健二 私は社会学が専門で、携帯電話がコミュニケーションをどう変えるかなどの問題を考えてきました。落語は一ファンです。

昇吉 私は大学で落語がメディアの変遷のなかでどう広まったかを教えています。仏僧が難しい教えを伝えようと寺で話した^{※4}のが落語の始まりで、それが辻講釈となり、戦いの陣中で無聊を慰めるために御伽衆が話すようになった。メディアは本からラジオ、テレビ、レコード、CDなどと移り変わり、いまはZoomですね。

健二 近世から近代にかけて東京には寄席が多



※1 総長賞に総長大賞が新設されたのがこの回。数理学部研究科棟大講義室で行われた授与式で小宮山宏総長（当時）から表彰状を受け取った後、受賞者プレゼンの段では落語を一席披露しました。

※2 落語史の研究で知られる本学名誉教授。著書に『江戸落語 誕生と発展』（講談社学術文庫／2011年）など。

※3 岡崎哲二先生の談話「國枝明弘さんは、経済学部で2年間、私のゼミに所属していました。当時はゼミの学生が少なく、勉強の負担が大きかったと思います。それでも彼は落研のかたわら、まじめに取り組んでくれました。2016年のゼミOB会で都知事選挙の争点だった豊洲市場問題とドングリコロコロの歌をからめて「ドジョウが出てきて今日は」という小話を話してくれたことが忘れられません」

※4 「高座」という言い方を使ったり、手ぬぐいを「曼荼羅」と呼んだりするのはその名残です」と昇吉師匠。

※5 初版は1969年刊。版元・青蛙房の社名は岡本綺堂の『青蛙堂鬼談』に由来。



佐藤至子先生が座談会のために持ってきた書物。「増補落語事典」のほか、山本進先生の『図説 落語の歴史』(河出書房新社)、延広真治先生の『江戸落語 誕生と発展』(講談社学術文庫)、昇吉師匠の『東大生に最も向かない職業』(祥伝社)などが見えています。

※6 「七度狐」。

※7 「堀之内」。



昇吉師匠が落語についてあまり詳しくない方を意識しながら著した『マンガでわかる落語』(誠文堂新光社/2020年2月刊)。

座談会は安田講堂2階の特別会議室で落語会の直前に行われ、同席した報道陣との質疑応答も行われました。

くありました。当時は寄席がメディアの役割を果たしていたことが分かります。落語はその頃に社会と深く重なったと思います。

昇吉 メディアによって落語の話し方も変わったし、落語によってメディアが変わった面もありますね。円朝の口演を記したのが講談本のはしりで、講談本で成長したのが講談社だとか。

津田 落語と東大は縁が深いとも聞きました。

東大落研のOBが重要文献を編集

至子 夏目漱石の落語好きは有名ですね。「三四郎」では、三四郎が九州から上京する際、車内で知り合った女性と名古屋の宿に泊まります。その場面は落語の「宮戸川」によく似ています。三四郎たちが寄席に行って三代目小さんを聞く場面もあります。正岡子規は円朝の落語を聞いていましたし、漱石と子規が親しくなったのも落語がきっかけだそうです。東大落語会が編集した『落語事典』※5という本もあります。東大落語会は東大落語研究会のOBで構成される会です。芸能史研究で知られる山本進先生が昭和25年に東大に入学して日本文化研究会落語部を前身に落研を創設されました。

津田 落語家にとっては必携の本ですか？

昇吉 そうですね。上方との言い方の違いを調べたり、同じ題名で別の話を調べたり。違う題名で同じ話を調べたりするときに重宝します。

津田 一つ伺いたいことがあります。落語は古典芸能ですが、いま聞いても古いと感じないし、常に今日のであり続けています。どうしてでしょうか。実は東大も、先端部分だけではなく、歴史や伝統も大事にしないといけません。目指すものが落語と共通しているように思います。

昇吉 言い方や言葉使いといったインターフェイスは時代に応じて変わりますが、笑いの本質の部分に普遍的な要素を含むから、でしょうか。

至子 笑いだけでなく、悲しい、切ない、恐ろしいなど、人間の感情を伝える落語が心をつかみます。昔の話でも感情の部分は同じだから現

代の人も共感できるのだと思います。

津田 学術の世界と通じるかもしれませんがね。

健二 昔、米朝は「じごくばっけいもうじやのたわむれ地獄八景亡者戯」を得意としましたが、晩年にはできないとやめる。くすぐりの部分を現代的に入れられなくなったという自覚ゆえです。落語には現在の面白さを敏感に捉える必要がある一方で、話の基本構造を維持し洗練すべき部分もある。両方必要ですね。昇吉 古い落語をやる場合も現代の息吹を入れてフレッシュにしないとイケません。そうするからこそ喜んでもらえるのだと思います。

落語から見える時代ごとのリアリティ

健二 学生時代、延広真治先生の授業に出たら、味噌のかわりに土が雑炊に入っている話※6を解説していました。荒唐無稽ですが、実は飢饉時に土をどう食べるかという話が当時の文献に出できます。湯屋で息子の背中と間違えて板を洗う話※7もあります。現代の感覚だとありえないですが、当時の風呂の暗さを考慮しなければならない。その時代のリアリティが落語から見えるのが、社会学的にも面白いんです。

昇吉 飯は箸と茶碗で食うものだとと言われて「ライスカレーは匙で食う」と応じる話には、当時珍しかったカレーが取り入れられています。落語は時代考証的な要素も含んでいますね。

津田 東大と落語でどんな連携ができますか？

昇吉 落語の時代考証的な要素を考えると、落語をプレゼンに役立てるとか、ワークショップはいくつかやれるのではないかと思います。

津田 落語の口上は講義が上手な先生と雰囲気に近いと思いました。人に訴える技は共通ですね。最後に学生へのメッセージもお願いします。

昇吉 学生時代の友人たちはどんどん年取りが上がり、収入格差が広がる一方です。決して落語家を目指さないように、と言いたいです。その分、寄席の入口に昇吉の名があったらぜひチケットを買っていただきたいと思います。

津田 「令和の名人」の誕生を待っています。





カンファレンスルーム (DOMA)



上：リモートで行われた感謝状贈呈。感謝状は後日NYへ。中：夜のNY会場に集まった関係者の皆さん。下：本郷会場で登壇した7先生。

東京とNYを結んで式典を開催

8月4日、東京大学ニューヨークオフィス (UTokyoNY) のリニューアル開所式典・記念講演をオンラインで開催しました。朝の伊藤謝恩ホールと夜のニューヨークオフィスの双方を結び、13時間の時差を越えて配信するという初の試みでした。UTokyoNYは、医科学研究所と生産技術研究所が主体となり、教育研究活動の情報発信拠点として2015年に設立されましたが、大学所管施設への変更に伴い、昨年2月にオフィス機能の拡張と充実を図るため、改装工事に着工しました。途中、コロナ禍による工事の中断もあり、昨年末ようやく竣工となり、この度の開所式典となりました。

開所式典は、相原博昭社会連携担当理事、藤井輝夫総長の挨拶に続き、津田敦執行

役・副学長より工事に貢献いただいた企業への感謝状贈呈を行いました。その後、オフィスから増山正晴UTokyoNY理事長による現地同窓会や関連企業等の来賓のご紹介、乾杯、オフィス内案内がありました。

続いて、林香里国際担当理事、岡部徹生産技術研究所長、山梨裕司医科学研究所長、川添善行生産技術研究所准教授の4名が講演を行いました。林理事は、知ることは変身することだという本学出身の美学者・伊藤亜紗さんの言葉を引きながら、留学する日本人学生が他国に比べて少ないことには知の触発の観点から見て大きな問題があると指摘。国籍やジェンダーに限らず東大生の属性の偏りを危惧せざるを得ないが、学生がこれまで会ったことのないような他者と対話して想像力を磨くためにUTokyoNYが大きな役割を果たすはずだと期待を述べ

ました。岡部所長は、オフィス立ち上げから今に至るまでの様々なエピソードと、関係した多くの教職員への感謝の念を語りました。山梨所長は、FUTI (東大友の会)、NY銀杏会、さつき会アメリカなどUTokyoNYに尽力してきた同窓会組織について紹介し、今後のネットワーク構築への期待について語りました。川添先生は、コロナ禍のため現場に行かず完成を目指す特別なプロジェクトになったこと、各々の木の由来を説明することがコミュニケーションのきっかけになると期待して「知の棚」を設置したこと、建築は作品ではないので今後はオフィスを自由に使い倒してほしいことなど、設計者としての思いを伝えました。

式典に続いて、河岡義裕医科学研究所特任教授による記念講演「新型コロナウイルスの征圧に向けて」が配信されました。

UTokyo NYは、全学の国際活動拠点です。最大50名程度のセミナー、ワークショップを開催できるオープンスペースを備えた、日米の研究者・学生・卒業生等の研究・交流の場です。今後、活動の範囲を広げ、研究助成事業や奨学金の支給等、研究・教育活動のサポートも行い、北米における本学のプレゼンスの向上を目指しています。オフィス利用や助成事業等については、本部社会連携推進課までご相談ください。

nyo.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

UTokyoNY、これまでの経緯

2015年11月	医科学研究所と生産技術研究所が主体となってオフィスを開設し、開所式典とオープニングイベントを実施
2017年11月	第1回 UTokyo Global Advisory Board Meeting で UTokyoNY 等の海外拠点の活用が推奨される
2018年11月	第2回 UTokyo Global Advisory Board Meeting で UTokyoNY を活用した米国における資金調達の方策が議論される
2019年3月	海外での資金調達の方向性を科所長会議で提示
2020年2月	UTokyoNY 運営協議会を設置
2020年2月～12月下旬	オフィス改装工事 (途中、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による工事中断あり)
2021年8月	リニューアル開所式典・記念講演



ミーティングルーム



「知の棚」

←陸前高田で被災した松、一高の教室にあった机、岩国の錦帯橋や東京駅の駅舎に使われた木材……。オフィスの名物は本学とゆかりのある様々な地域の木材で作った棚。サステナビリティの概念を発信し、世界に対する日本の貢献を示唆しようという思いが込められています。

教養教育の現場から

第47回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

古きよき教養教育と時代に即した手法を融合

／KOMEX第4代機構長に聞く

——網野先生は4代目の機構長ですね。
「前機構長の退任に伴い、2019年度にアクティブラーニング部門長を務めた私が機構長になりました。私自身は古い教養教育にシンパシーを感じるタイプの人間でしたが、部門長としてアクティブラーニングに深く関わった際、教養教育が変わりつつあるのを実感したのです。教養学部を残した数少ない大学として時代に適応することが重要なのだとあらためて気づいた次第です。現在は、各部門の先生と話をしつつ、機構について理解を深めている最中で、大それたことを言える状況ではないというのが正直なところ。まだ見習い期間の機構長です」

新しいやり方で授業が活性化

——古い教養教育と言いますと？

「私は1・2年生にはスペイン語を教えています。昔はまず文法を徹底的に学び、辞書を片手にテキストを訳していく「文法訳読」が主でした。教員が説明して学生はたまに当てられたら答えるという形です。私自身、最も尊重する方式ですが、近年は、積極的に学生に考えを述べさせ、対話を促すやり方が盛んです。実際に取り入れてみると授業がより活性化するの

がよくわかります。「リアクション・ペーパー」を用いれば学生に伝わらなかった部分を把握して次の授業で活かしますし、ラテンアメリカをめぐるエピソードをもっと知りたいといった学生の要望もわかります。COVID-19禍を機にリモート授業が主となり、アクティブラーニングの手法は必要度が増していると感じます」

——オンライン授業のほうが学生は質問しやすいそうですね。

「教室だと周りの目が気になり、初歩的なことを聞いたら恥ずかしいという気持ちもあるのでしょうか。でもそういう質問こそ、講義では大切なのです。一方、教室にあってオンライン空間にはないものがあるとも感じます。教室では学生の表情を見ながらいろいろと工夫し、語学が苦手な学生を引き上げることもできましたが、オンラインだとそれがやりにくく、個人的な印象ですが、できる人との差が開きがちです。私の場合、2年目になってもどかしさが顕在化してきました」

他部局の諮問委員の声も反映

——以前の機構長は学内連携強化や後期課程の教養教育推進を方針に挙げていましたが、新機構長はいかがですか。

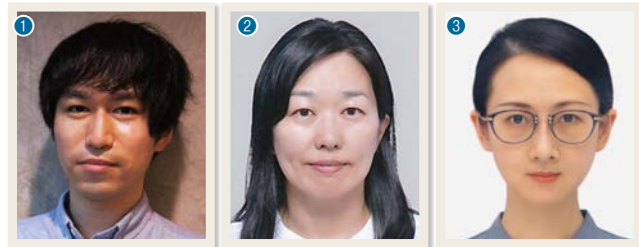
「すでに機構の枠組みはしっかりできており、組織としては成熟期にあると思います。オンライン授業が主という状況はおそらく今後も続くでしょうから、不自由を強いられる授業運営のなかで努力を続ける機構の先生方を支えるのが私の役割だと思います。昔、大学の一般教養教育は「パンキョー」と呼ばれて軽視されがちでしたが、以前講義を担当したペルーのカトリカ大学では2年の教養教育を経て専門教育に進むやり方がとてもうまく機能しており、教養学部を残した東大は間違っていないと確信しました。日本の衰退の最大の原因は大学の教養教育をなくしたことだ、教養教育をしっかり支えなさい、と励ましてくれた科学者もいます。運営については、前期課程の学生を預かる学部として全学の声を取り入れる方針の下、他部局から5人の先生を運営諮問委員に招いています。この2年はCOVID-19禍の影響で諮問会議が開けなかったため、私の在任中にはぜひ開催し、頂戴したアドバイスを反映させていくつもりです。その上で、古さと新しさが融合した東大ならではの教養教育を追求したいと思っています」

機構長

網野徹哉



KOMEX今年度新任教員の顔ぶれ



1 寺岡知紀
(政治思想史)

2 松田葉月
(ラテンアメリカ地域研究)

3 朱芸綺
(映画学)

①初年次教育部門講師「政治思想のテキスト読解を通して学生の批判的精神を養っていきたいと思います」②実施部門准教授「スペイン語教育とラテンアメリカ研究に貢献できるよう頑張ります」③国際連携部門特任助教「海外との架け橋として、新たな国際交流モデルの改良と発信に努めてまいります」

8～9月に行ったKOMEXのイベントより



8月1日	オンラインイベント「組織開発のプロが語るコミュニティづくりの3つのポイント」【面白いこと発見企画・第4弾】
8月29日	ワークショップ「第2回 東大生がつくるSDGsの授業」
9月8日	ワークショップ「オンラインでこそアクティブラーニング：アクティブで双方向的な授業のヒント」
9月12日	第3回 模擬国連ワークショップ

学生有志と社会連携部門が開催した、コミュニティ作りの要点を小松由さんに聞く企画のポスター。

シリーズ 第38回
連携研究機構

心の多様性と適応の
連携研究機構 の巻



話／
小池進介先生

心と精神に関わる研究・教育を繋ぐ

——2015年度に総長室総括委員会の機構として生まれたUTIDAHMが連携研究機構になったんですね。「心や精神の研究は従来から複数部局で行われてきましたが、所属先以外ではどんな研究があるか知らない場合も多く、学内連携が必要だということで発足しました。当初は総合文化、医学系、法学政治学、人文社会系、教育学の5部局で、2017年度に理学系と薬学系、今年度に工学系、新領域、生研、IRCNが加わりました」

——この6年間の主な活動ぶりをご紹介ください。

「心と精神の科学に関する情報を取りまとめて照会に応じ、学内の風通しをよくするという任務を進めてきました。MRIで測定した脳画像データを数理モデルで解析する研究、法的な判断をする際の脳の活動を調べる研究、スマホの位置情報から人の行動パターンと精神疾患の関係性を見る研究など、機構を軸にした研究者の出会いが新しい研究に繋がっています。人間行動科学研究拠点準備室(CiSHuB)とともに開催してきたシンポジウムも大きな役割を果たしてきました」
「2016年度に始めた「こころの総合人間科学教育プログラム」(PHISEM)は非常にうまくいっている学部横断型教育プログラムの一つです。心の科学に関わる教員が結集し、基礎的視点と臨床的視点の両輪を備えて心の多様性と適応に総合的に向き合える人材を育成しています。毎年5~10人の修了生が出ています」

——改組を機に変わることは何でしょうか。

「教育・研究用のMRI装置がKOMCEE Eastにあります。CiSHuBと合併した今年度から当機構も運営を担います。このMRIは非常に稼働率が高く、年3000万円以上かかる運用費を利用料で賄っています。企業の研究者が使ったり、PHISEMの実習で学生が自分の脳の働きを解析するのに使うこともあります。学外からも成功事例として注目されています」

——心と精神の科学の分野の動向を教えてください。

「私は精神疾患の研究と学生相談の仕事をしてきました。昔は心の不調を相談する人は限られましたが、近年は学生相談所や精神科に行く人が増えています。2000年代に発展したMRIで脳の血流変化もわかるようになった成果でしょう。昔は精神疾患は脳の問題ではないと考える専門家もいましたが、脳の機能障害が心の問題に繋がることは今では皆了解していて、治療やカウンセリングでその障害が治療される様子も可視化できるようになりました。研究でも業務でも心の問題に向き合う際には人の影絵が目印のロゴを思い出してください」



plaza.umin.ac.jp/~UTIDAHM/

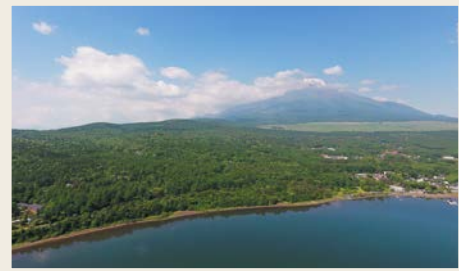
あちこちそちこち 東京大学 第27回

本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

農学生命科学研究科附属
富士癒しの森研究所の巻

講師
齋藤暖生

「森の癒し」を探求するフィールド



富士山と山中湖に囲まれた環境

富士癒しの森研究所(以下、研究所)は、本学に7つある演習林の一つです。山梨県山中湖村に立地し、眼前には山中湖、背後には富士山という、恵まれた環境にあります。こうした立地を活かし、人が癒しを得られるような森林のあり方を追求しているのが、研究所の特徴です。

森の癒し機能と森林管理の方法(間伐の仕方など)の関係を検証する研究や、地域社会に飛び出して、地域住民の森林との付き合い方を探る研究などに取り組んできました。最近では、芸術など、森林空間を活用する場面を広げるということにも注目しており、実験的に森の中の音楽会を実施するなどしています。

私たちが重視しているのが、実践を通じた研究です。地域住民のみなさんと協働しながら、親しみやすい森林の整備を試みるなど、様々な取り組みを行っています。こうして、森林に親しむ人の輪を広げ、癒しをもたらす森林が公共の財産と管理されていく道筋を描くことは、研究所の大目標となっています。

「癒しの森」のほぼ真ん中には、山中寮内藤セミナーハウスがあり、本学構成員(だった人も)が利用することができます。株式会社アブルポアによって管理運営され、日々、進化を遂げています。ここは、学生実習やリトリート研究会での滞在拠点となり、テレワークもできます。ぜひ、みなさんも「森の癒し」の実践に訪れてはいかがでしょうか。



1.癒しの森の宵やみ音楽会。2.研究所の理念や実践を紹介した書籍。3.森に囲まれた滞在拠点として進化を続ける山中寮。



癒しの森YouTubeチャンネルはこちらから

www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/fuji/

ワタシのオシゴト 第184回

RELAY COLUMN

本部人事企画課
人事戦略チーム・係長 前田大輔

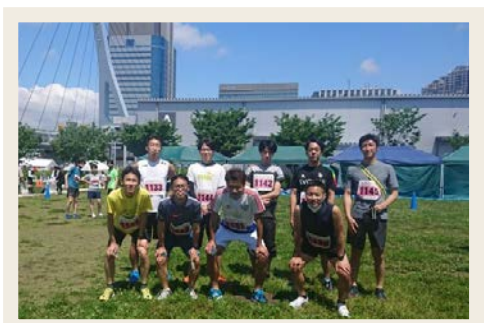
ポスト管理から財源管理へ

Zoomで
打合せ？

私が所属している人事戦略チームは、給与水準の公表や常勤教職員の人件費管理、教職員の採用可能数の管理など本部人件費に係る業務を主に行っています。

直近の業務トピックはタイトルにもしていますが、昨年度、教員の採用可能数再配分制度の改定を行い「ポスト（採用可能数）管理から財源（人件費）管理」への移行を促進しました。財源管理に移行することにより、職位のアップシフトや高額給与の教員の雇用など部局の裁量による人事の幅を広げることが可能となり、教育・研究活動の活性化等が期待されます。

プライベートでは、2年前からトライアスロンに挑戦しています（昨年は骨折やコロナの影響で大会には出場できなかったのですが……）。ランニングは元々やっていたのですが、スイム&バイクはゼロからのスタートのため、まだまだ初心者の域を脱してはいませんが、いずれはアイアンマンを完走することを目標に勇往邁進していく所存です。



東大チームでリレーマラソン優勝&準優勝

得意ワザ：ランニングのペースメーカー

自分の性格：好奇心旺盛

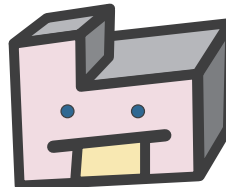
次回執筆者のご指名：池田安奈さん

次回執筆者との関係：はんつまグループのメンバー

次回執筆者の紹介：誰からも好かれる人柄です

いちょうの
部屋

学内マスコット放談

今回のゲスト
のうとくん

農学生命科学図書館マスコットキャラクター

名前は「農」+「図」。正面から見るとし字型の特徴的な建物の中には「うみうし通信」「養豚情報」「月刊むし」などディープな素敵雑誌の蔵書もたくさん！

いちょう●キミは誰？というか何？

のうとくん◆農学生命科学図書館のマスコットキャラです。開館50周年の2015年に誕生し、オープンキャンパスとか学生ガイダンスとか展示とかSNSでの情報発信とか様々な業務で大忙しでした。Twitterアカウントのアイコンはもちろん自分です。生命に関わるありとあらゆる研究をしている農学部だからこそ、自分のような謎のキャラクターも温かく存在を許されている気がします。

い●図書館だとこまとちゃんが有名だけど、友達？

の◆友達というか、きょうだいみたいなのですね。

い●舌を出しているように見えるのはアインシュタイン博士かローリング・ストーンズへのオマージュ？

の◆これは皆さんを迎えるお茶目な玄関です！

い●じゃあ、顔の右側の出っ張り部分は？何か入っているの？それともうつろな空洞？

の◆これは由緒ある出っ張りで、増築や耐震工事を重ねても外観は開館当時のまま。実はその中には安全を守る消化水槽とポンプ室が設けてあります。

い●シール、付箋、スタンプ、クリアファイル、团扇、手製のバッグにぬいぐるみとグッズ展開が手広いね。

の◆2016年度には業務改革総長賞を受賞しましたよ。従来のガイド付き図書館ツアーをセルフツアー方式に改め、職員の業務量削減と利用者サービス向上の両方を実現したんです。この試みがその後ほかの図書館にも広がったりして、自分もちやほやされていたんです。

い●新しい潮流を作り出すなんてスゴいね！その無表情な顔の造作からは想像もできないくらいに。の◆目がうつろだと言われますが、以前大好評だったブックカバーではレアな笑顔も見せています。

い●ふーん。じゃあ、マスコットとして、外見以外の農学図書館の特徴とか言いたいことあったら教えてよ。の◆貸出冊数無制限！推しの貴重書は「國牛十圖」^{※1}！図書館の使い方がわかる「動画ナビ」^{※2}に今年はさらに様々な案内を追加しようと頑張っています。図書館キャラなので自分からはなかなか遊びに行けませんが、いつも弥生の地で皆さんのご来館を待っています。



※1 国産牛の図説（鎌倉末期の卷子本）<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/agriculture/page/list>

※2 <https://www.lib.a.u-tokyo.ac.jp/lib/navi.html>

インタープリターズ・第169回 バイブル

総合文化研究科准教授 豊田太郎
科学技術インタープリター養成部門

Inter-Dictionaryをつくろう

私が運営委員を務める先進基礎科学推進国際卓越大学院教育プログラム(コーディネーター:福島孝治教授)がこの春に3期生を迎え、プログラム生は30名を超えた。様々な学問分野で「基礎科学を深め、発展させよう」と気概溢れる大学院生との交流は、私には刺激の連続でプログラム生に眩しさを感じると同時に、自らにも活を入れる日々だ。中でも、学際研究(Interdisciplinary Study)にアプローチする大学院生の発表は記憶に新しい。学際研究は、本当に難しいと私自身も感じる。多分野の体系を真摯に学び、自身が何を理解するために研究するのかを研ぎ澄ます。そこで大事なことは対話と辞書ではないだろうか。

例えば、科学技術社会論では、「科学技術と社会との界面」というフレーズがよく使われるようだ。これを聞き、私は大いに興味が湧いた——化学と物理学でさえも、「界面」のとらえ方が異なって議論がかみ合わないこともあるのに、科学技術社会論という「界面」とは何を指すのだろう——。図書館で『科学・技術・倫理百科事典』(丸善)を紐解いたが、勘所を探り当てることはできなかった。この「界面」には人々の動的なコミュニケーションの何かの特徴が表されているのだろう、浅学な私に理解できるのは先のこともかもしれない。

最近、多言語話者の方が二言語話者よりも、外国語習得にむけて脳がより活発になるとの報告がなされた*。多分野の体系に触れて、それぞれの体系にある辞書・事典について、ある時には連関を俯瞰し、別の時には個別に深化したりする活動(Inter-Dictionary Studyと名付けよう)が、学際研究に取り組む大事なステップともなるはずだ。

私自身は縁あって、アーティストと共同プロジェクトを始めることになった。プロジェクトの詳細な説明は別の機会にゆずるが、プロジェクト内の対話は、互いの創作・表現から学び合ってなされており、活字の辞書も事典もまだない。活字段階にないInter-Dictionaryをつくりあげていく過程は、実験にのめり込むときの没入感さながらで大変面白い。

*Umejima, et al., *Scientific Reports*, 11, 7296 (2021).
(オープンアクセス国際誌なので、インターネット上で無料で閲覧できます)

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpret.c.u-tokyo.ac.jp

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第14回

教育学研究科博士課程1年 久島裕介

中学生と考えた「未来予想図」

私たちは昨年度、「withコロナ時代での新しい働き方を考える」というテーマのもと、山形県高島町の中学生との交流会を2回、オンラインで実施しました。自治体担当者の課題意識は、「地域に残ろうと考える子どもは多いが、将来の展望もなく生きようとしている。積極的に将来像を描けるようになってほしい」というものでした。これに対して学生たちは、「将来像を、社会の問題を視野に入れながら描けるようになってほしい」と提案をしました。そこで、私たちは、①「将来の(職業)社会がどう変化しているか」、②「自分の生き方の「軸」は何か」という二つの問いを考えることを通して③「10年後の未来予想図」を描くという交流会を構想しました。

交流会では、2回ともに約20名の中学生が参加してくれました。

①の問いについては、同様の職業に興味がある中学生ごとにグループ分けをし、その職業について、社会の変容も踏まえた問いを大学生が提示しながら考えました。②の問いについては、中学生の憧れの人物・キャラクターを掘り下げていくという形で考え、その上で③「10年後の未来予想図」を発表してもらいました。例えばSさんは、①医療は今よりもっと重要な仕事になっており、②差別をせず、優しい人になりたい、と考え、③医療がいき届いていないような場所で医療に携わっている、という未来予想図を発表してくれました。

今回の交流会は、中学生が将来を考えるきっかけ作りができた点で有意義な活動であったと思いますが、いくつか課題もありました。第一に、子どもや地域の実態を大学生が十分に把握できず、中学生の行動変容に結びつける働きかけができなかった点です。第二に、オンライン交流は時と場所を選ばず接続できるという利点があるにも関わらず、設備的な問題で交流の機会が限られた点です。こうした点を踏まえると、やはり実際に現地での調査・交流は不可欠であるとともに、またオンライン交流が気軽に行えるようなシステムづくりが必要であると思いました。



オンライン
交流会
の様子

www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/special-activities/h002.html

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles, Notices)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
8月12日	本部社会連携推進課	東京大学ニューヨークオフィス リニューアル開所式典・記念講演を開催
8月13日	本部国際交流課	IBM Call for Code: 参加学生の募集開始
8月15日	本部広報課	火災の発生につきまして (お詫び)
8月17日	本部環境安全課	第5回東京大学環境安全衛生スローガン募集実施報告、令和3年度「東京大学安全の日」講演会開催
8月31日	本部国際戦略課	東京大学スリランカ事務所カルナラトネ所長が令和3年度外務大臣表彰を受賞
9月1日	本部安全衛生課	モデルナ社製新型コロナウイルスワクチンの異物混入に関する本学の対応について
9月6日	新領域創成科学研究科	学生チームの作品「浮雲」が学生サマーセミナー2021で最優秀賞を受賞
9月6日	新領域創成科学研究科、工学系研究科・工学部	「アラブ首長国連邦(UAE)館:Wetland」が金獅子賞を受賞 小濑祐介研究室、佐藤淳研究室が制作協力
9月6日	本部広報課	学生のうちにマイノリティ経験を ダイバーシティと東大02 伊藤たかね 副学長の巻
9月8日	大学総合教育研究センター	東京大学フューチャーファカルティプログラム 第17期 履修証授与式
9月8日	生産技術研究所	英文広報誌「UTokyo-IIS Bulletin」Vol. 8を公開
9月10日	本部広報課、本部学務課	博士課程支援プロジェクト「SPRING GX」の開始について
9月13日	本部広報課	広報誌「淡青」43号を発行しました



CLOSE UP 「東京大学安全の日」講演会とスローガン表彰を実施 (本部環境安全課)



優秀作に選ばれた6つのスローガン。



スローガン6作品の表彰より。

本学では平成17年に発生した本学関係者の死亡事故を受けて7月4日を「東京大学安全の日」と定めています。本講演会は、事故の記憶を風化させず、大学全体の安全レベルを継続的に向上させることを目的として、毎年開催しています。今年度も7月6日に、「知識を生かした安全管理」をテーマとして「東京大学安全の日」講演会を環境安全本部 岸利治本部長の総合司会によりオンラインで開催しました。

講演会の第一部では、元日本製鉄株式会社人事労政部長 安福慎一様より、「企業の安全衛生に取り組んで～専門知識を現場に生かす～」というテーマでご講演をいただきました。続いて、環境安全本部 大久保靖司教授より、「令和2年度事故災害報告」が行われました。昨年度はコロナ禍で事故災害の発生件数が減少傾向にある一方、新型コロナウイルス感染症対策により新たなリスクが発生していることから、環境変化が起きる際にはリスクも付随して変化するということが昨

年度の事故災害の統計から見た教訓であるとのことでした。第二部では、総合文化研究科 今井一博准教授より、「競技者に対するスポーツ医科学支援」という題目で、学生等への安全研修および体育授業における新しい取り組みの紹介に加えて、オリンピック等の競技者への外傷等の治療サポートおよび心理的サポート等の取組みと、安全の確保および競技成績の向上におけるスポーツ医科学の役割と重要性に関する講演をいただきました。今回は学内限定での開催でしたが、約280名の大勢の方にご参加いただきました。

また、講演会に先立ち、本学構成員の安全意識の醸成を目的として実施した「第5回環境安全衛生スローガン」の受賞作品が発表され、総長賞には「Treasure your health & our Earth」が選ばれました。今年度は19部局63名の本学構成員から延べ229件の応募があり、特に優秀なスローガン6作品が総長賞(1件)、総長特別賞(1件)、理事賞(1件)、環境安全本部長賞(3件)を受賞しました。



CLOSE UP 広報誌『淡青』43号を発行 (広報室)

広報室が年に2回発行している広報誌『淡青』の最新号ができました。今号の特集は「藤井新総長就任」と「海と東大。」です。藤井輝夫総長とロバートキャンベル先生との対話企画を皮切りに、総長とともに大学運営を担う新執行部の顔ぶれ紹介、海から始まった藤井研究室の歩み、そして、海洋政策学、海洋経済学、

海生哺乳類学、気候力学、魚類生物学、海洋法学、海洋微生物学、魚病学といった海に関わる東大の研究者&プロジェクト&施設の挙紹介へと続く全27ページで、海への関心が世界的に高まる年に始まった東大の新たな6年間を展望します。今号から融合した「東京大学校友会ニュース」もあわせてぜひ一読を!

表紙は生産技術研究所
5棟です



※「学内広報」では広告掲載を受け付けていません。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。↓本部広報課（03・5841・2031）



CLOSE UP フューチャーファカルティプログラム履修証授与式を開催 （大学総合教育研究センター）



第17期履修証授与式の様子。

8月27日、東京大学フューチャーファカルティプログラム（東大FFP）の第17期修了者に対する履修証授与式が行われました。

今期も、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえ、オンラインで開催しました。浅見泰司 大学総合教育研究センター長よりご挨拶と祝辞を頂戴し、修了生57名が履修証授与を受けました。

東大FFPは、大学院生・ポストドクター・若手教職員を対象として、シラバスの作成や模擬授業の実施等を通じた教育力の向上を目的とするプログラムです。これまでに学内全ての研究科から、合計810名の修了者を輩出しています。

来期（第18期）の開講は2021年10月を予定しています。



CLOSE UP 学生チームの作品「浮雲」が最優秀賞を受賞 （新領域創成科学研究科）



「浮雲」の全体像。上部は天井ギリギリ!



制作チームの皆さん。写真：下山田勇祐

新領域創成科学研究科 社会文化環境学専攻 佐藤淳研究室の学生チームの作品「浮雲」が、日本建築学会主催の学生サマーセミナー「集積あるいは変化するストラクチャル・アート」において最優秀賞を受賞しました。学生サマーセミナーは、空間・形態・構造が融合したストラクチャル・アートを通じて「ものづくり」の面白さを体感することを目的にコンペ形式で開催されています。今年度は16回目の開催で、参加38チームのうち17チームが一次選考を通過しました。最終選考は、各所属機関において作品を制作し、オンラインで中継する形で行われました。

学生サマーセミナーに参加したのは、佐藤淳研究室の中村太一、木下睦貴、猿田佳奈子、周穎琦、森永魁、山崎海斗の5名の修士課程の学生を中心としたチームです。今回の作品「浮雲」は、団子状のユニットを高さ7メートルに組みあげた巨大オブジェクト。雲がふわふわと軽やかに浮かぶように見えることから名付けられました。チームリーダーの中村さんは、「軽くて柔らかなデザインで7メー

トルの高さを目指すことを意識し、そのための構造物を設計した」といいます。2週間程度のタイトなスケジュールで7メートルもの高さのある構造物を制作するには、簡素な検証（単純化したモデルを考え、構造計算すること）で安全性を判断するエンジニアリングの省略の技が試されます。お団子ユニットが細かいカーボンロッドを拘束する構造デザインはそうした背景から生まれました。会場が建築会館から各所属機関に変更になったり、当初予定していた材料が手に入らなかったりといった思わぬトラブルも発生しました。「急遽別の素材を調達したり、構造設計をやり直したりなど予定よりも多くの工程を踏むことになりましたが、メンバーのポテンシャルの高さと根気強さで乗り越えることができました」と中村さんは振り返りました。

佐藤淳研究室では、年に数回デザインビルド形式のワークショップに参加しており、この学生サマーセミナーにはここ数年毎回参加していますが、最優秀賞を獲得したのは今回が初めてでした。

コロナ禍 vs 東大 Now 新型コロナウイルス情報WG発

第10回／キャンパスの安全を守れ！入構管理の取り組み

門の前で立ち止まり、スマホを取り出して構内へ——そんな光景が日常になって1年以上が経ちました。コロナ禍でキャンパスの安全を保つには適正な入構管理が不可欠です。現在、本郷地区では本郷キャンパス6箇所・弥生キャンパス2箇所、駒場1キャンパスでは正門（時期によりもう1箇所）だけに入口をしぼり、有人通行管理を行っています（柏キャンパス等は建物ごとの管理）。

入構時は、本郷地区では「健康管理報告サイト」、駒場1では「入構/施設利用申請サイト」に入力し、返信メールを門で提示します。駒場1では身分証の提示も必要で、両地区とも紙の健康管理報告や入構届でも入れま

すが、学外者の入構は原則として認めていません（目的・用務を限定した申請者のみ許可）。

このような仕組みは、有症状者の入構を規制するとともに、感染発覚時に迅速に対応するため、情報は保健センターが管理しています。システムの構築は最初の緊急事態宣言下で急ピッチで行われました。駒場1では教養学部の学部長室と総務課・学生支援課・教務課が一丸となって設計し、2020年6月15日に運用を開始。本郷でも、本部総務課総務チームの奮闘で7月20日から稼働しました。

このような努力のおかげで入構数の把握や行動履歴等の追跡が可能となり、キャンパスの安全が保たれているのです。全ての門が再び



開かれるまで、しばらくお世話になります。
（杉山清彦／総合文化研究科・広報室副室長）



制約からの発見

「制約」はネガティブな響きを持つ言葉です。しかし、創造的で個性的な仕事をするためには、制約の無い状態がベストでしょうか。何をやってもよいということが良い発想を生むでしょうか。私はそうは思いません。

尺八と琵琶とオーケストラのための作品「ノヴェンバー・ステップス」などで世界的に知られる武満徹さんは、「何も制約がないと、自分が制約条件になるんです。自分の趣味や自分の手の癖から抜け出せなくなる」と語っています（『武満徹・音楽創造への旅』立花隆著）。武満さんは音大には入らず作曲はほぼ独学です。デビュー作は当時の著名な音楽批評家に「音楽以前である」と酷評されました。しかし、アカデミックな音楽教育を受けなかったという大きな制約が、逆に、従来の作曲法の制約から彼を解放しました。さらに武満さんは自分の作曲法に敢えて制約を導入することで、自己模倣ではない新しい表現を生み出しました。

私は生命科学を専門にしていますので、この分野の「制約」からの研究を紹介します。戦後、阪大で研究を始めたばかりの早石修先生は、必須アミノ酸の一つ、トリプトファン

の研究で有名な古武彌四郎先生から、天然物から抽出して集めたトリプトファンを研究に使って欲しいと渡されました。既に古武先生が一生かかって研究したトリプトファンを、お前のような素人が研究しても良い結果は出ないと周囲は悲観的だったそうです。しかし、薬品も研究費も乏しく、貴重なトリプトファンがあるのみという制約の中で、早石先生は古武先生が動物でやった研究の目先を変えて微生物を使った研究を始め、薬物の解毒やステロイドホルモンの合成にも深く関わっている酸素添加酵素を発見しました。

制約を、むしろ逆手に取って、どんな状況においても、しつこく課題に取り組まないと予期しない発見には出会えません。おもしろそうなこと、最近流行していること、楽に結果が出そうなことをつまみ食いするのではなく、間違っても軌道修正ができる学生時代にこそ、自分のテーマを「制約」して徹底的に追いかけることで、それまで気づかなかった自分の能力が発見できるのだと思います。

三浦正幸
(薬学系研究科)

